

キリン「AI研究員」の実像と知財戦略の死角：人間主役のAI共創モデルとそのリスク

「人間主役」のAIネイティブ戦略

AIは代替ではなく「伴走者」

研究活動の流れにAIエージェントを常時組み込み、研究者の「思考の分断」を解消する。



知的創造活動の上流を支援

仮説生成、情報探索、壁打ち、ドキュメント化を一体で支援し、発想の質を高める。

効率化から「価値創造」へ

単なる事務作業の削減ではなく、研究スタイルそのものを刷新して新素材・新商品開発を加速。

キリンAI導入の系譜と「価値創造」への進化



2025年5月

BuddyAI：
事務効率化（生産性向上）



2025年8月

CoreMate (AI役員)：
経営意思決定の支援



2026年8月

AIネイティブ研究環境：
知的生産性の向上（価値創造）

戦略に潜む「3つの死角」と対策



知財評価のボトルネック化

上流（仮説生成）の加速に対し、下流（他社権利調査/FTO）の負荷が増大し、知財部門が停滞する恐れ。

発明者は「自然人」に限る

日米の現行法ではAIを発明者に認定できず、人間の「着想」を証拠として残す運用が不可欠。



確証バイアスと再現性のリスク

AIが人間の問いに同調し、発想を縛る懸念。モデルのバージョン記録など再現性の確保も課題。